

# 水の女

折口信夫

青空文庫



## 一 古代詞章の上の用語例の問題

口頭伝承の古代詞章の上の、語句や、表現の癖が、特殊な——ある詞章限りの——ものほど、早く固定するはずである。だから、文字記録以前にすでに、時代時代の言語情調や、合理観がはいってくることを考えないで、古代の文章および、それから事実を導こうなどとする人の多いのは、——そうした人ばかりなのは——根本から、まちごうた態度である。

神聖観に護られて、固定のままあるいは拗ようきよく曲きよくしたままに、伝った語句もある。だがたいていは、呪詞ふうしよ諷ふうしよ唱者・叙事詩伝で

んしょう

誦

者らの常識が、そうした語句の周囲や文法を変化させて辻

じつま

棲を合せている。口頭詞章を改作したり、模倣したような文章

・歌謡は、ことに時代と個性との理會程度に、古代の表現法を妥

のりと

協させてくる。記・紀・祝詞などの記録せられる以前に、容易に

原形に戻すことのできぬまでの変化があつた。古詞および、古詞

応用の新詞章の上に、十分こうしたことが行われた後に、やつと、

記録に適當な——あるものは、まだ許されぬ——旧信仰退轉の時

が来た。奈良朝の記録は、そうした原形・原義と、ある距離を持

つた表現なることを、忘れてはならぬ。たとえば天の御蔭・日の

ことば

御蔭・すめらみこと・すめみまなどいう語も、奈良朝あるいは、

この近代の理會によつて用いられている。なかには、一語句でい

て、用語例の四つ五つ以上も持っているのがある。

言語の自然な定義変化のほか、死語・古語の合理解を元とした擬古文の上の用語例、こういう二方面から考えてみねば、古い詞章や、事実の真の姿は、わかるはずはない。

## 二 みぬまという語

これから言う話なども、この議論を前提としてかかるのが便利でもあり、その有力な一つの証拠にも役立つわけなのである。

出雲 くにのみやつこの 国 カムヨゴト 造 神賀詞に見えた、「をち方のふる川岸、こ

ち方のふる川ぎしに生立ワカミヌマ（おひたてるカ）若水沼間の、いやわか

えに、み若えまし、すゝぎふるを<sup>レ</sup>とみの水のいや復元<sup>ヲチ</sup>に、み変若<sup>ヲチ</sup>まし、……」とある中の「若水沼間」は、全体何のことだか、国学者の古代研究始まって以来の難義の一つとなっている。「生立」とあるところから、生物と見られがちであった。ことに植物らしいという予断が、結論を曇らしてきたようである。宣長以上の組織力を示したただ一人の国学者鈴木重胤は、結局「くるす」の誤りという仮定を断案のように提出している。だが、何よりも先に、神賀詞の内容や、発想の上に含まれている、幾時代の変改を経してきた、多様な姿を見ることを忘れていた。

早くとも、平安に入つて数十年後に、書き物の形をとり、正確には、百数十年たつてはじめて公式に記録せられたはずの寿詞<sup>ヨゴト</sup>で

あつたことが、注意せられていなかった。口頭伝承の久しい時間を勘定にいれないでかかっているのは、他の宮廷伝承の祝詞の古い物に対したとおなじ態度である。

「ふる川の向う岸・こちら岸に、大きくなって立っているみぬまの若い」と言うてくると、灌木や禾本類かほん、ないしは水藻などの聯想が起らずにはいけない。ときどきは「生立」に疑いを向けて、

「水沼間」の字面の語感にたよつて、水たまり・淵などと感ずるくらいにとどまつたのは、無理もないことである。実は、詞章自身が、口伝えの長い間に、そういう類型式な理會を加えてきていたのである。

一番これに近い例としては、神功紀・住吉すみのえ神出現の段「日向ひむか

の国の橘たちばなの小門おどのみな底に居て、  
水葉ミツハモワカ(?)稚ニイデキル之出居神。名は  
表筒男うわつつのお・中筒男・底筒男の神あり」というのがある。これも表  
現の上から見れば、水中の草葉・瑞々みずみずしい葉などを修飾句に据  
えたものと考えていたのらしい。変った考えでは、みつはは水走  
で、襪みそぎの水のほとぼし迸る様だとするものもある。

「みぬま」という語が「水葉」の用法を自由に行っている。動物・  
人間ともとれる言い方である。ただそうすれば、みつはは云々の句  
に、呪詞なり叙事詩なりの知識が、予約せられて見ねばな  
らぬ。それにしても、この表記法では、すでに固定して、記録時  
代の理會が加っているものと言えよう。

この二つの詞章の間に通じている、一つの事実だけは、やつと

知れる。それはこの語が禊ぎに關聯したものなることである。みぬま・みつはと言ひ、その若いように、若くなるといった考え方を持っていたらしいとも言える。古代の禊ぎの方式には、重大な条件であつたことで、夙はやく行われなくなつた部分があつたのだ。詞章は變改を重ねながら、固定を合理化してゆく。みつは・みぬまと若やく靈力とを、いろいろな形にくみ合せて解釈してくる。それが、詞章の形を歪ゆがませてしまふ。

宮廷の大おおほらえ祓式は、あまりにも水との縁が離れ過ぎていた。

祝詞の効果を拡張し過ぎて、空文を唱えた傾きが多い。一方また、神祇官の卜部うらべなかだちを媒まへにして、陰おんみょう陽道は、知らず悟らぬうちに、

古式を飜案して行つていた。出雲国造の奏寿のために上京する際

の禊ぎは、出雲風土記の記述によると、わりに古い型を守っていたものと見てよい。そうしてすくなくとも、これにはあつて、宮廷の行事および祝詞にない一つは、みぬまに絡んだ部分である。大祓詞および節折ヨヲりの祝詞の秘密な部分として、発表せられないでいたのかも知れない。だが、大祓詞は放つ方ばかりを扱うたことを示している。禊ぎに關して発生した神々を説く段があつて、その後新しい生活を祝福する詞を述べたに違いない。そして大おおな直日おびの祭りとその祝詞とが神樂化かぐらし、祭文化し、祭文化する以前には、みぬまという名も出てきたかも知れない。

### 三 出雲びとのみぬは

神賀詞を唱えた国造の国の出雲では、みぬまの神名であること  
 を知ってもいた。みぬはとしてである。風土記には、二社を登録  
 している。二つながら、現に国造のいる杵築きづきにあったのである。  
 でも、みぬまとなると、わからなくなつた呪詞・叙事詩の上の名  
 辞としか感ぜられなかつたのであろう。

水沼の字は、おなじ風土記にたのこおり仁多郡の一章に二とこまで出てい  
 る。

三津郷……おおなもちのみこと大穴持命の御子阿遲須积高日子命……ユメ大神夢  
 に願ネぎ給はく「御子の哭なく由を告ノれ」と夢に願ネぎまし、かば、  
 夢に、御子の辞通コトカヨふと見ましき。かれ寤さめて問ひ給ひしかば、

ソフトキ  
 爾時に「御津」と申しき。その時何処いづくを然言ふと問ひ給  
 ひしかば、即、御祖ミオヤの前を立去於タチサリニイデマ坐して、石川渡り、阪  
 の上に至り留り、此処ここと申しき。その時、其津の水ミヌマイデ沼於?  
 而ニテ、御身沐浴ソ、マぎ坐しき。故、国造の神吉事奏カレして朝廷ミカドに  
 参まいむか向ふ時、其水沼出イデ、而用る初むるなり。

出雲風土記考証の著者後藤さんは、やはり汲出説である。この  
 条は、この本のあちこちに散らばったあぢすき神の事蹟と、一統  
 きの呪詞的叙事詩であつたようだ。おそらく、国造代替りまたは、  
 毎年の禊ぎを行う時に唱えたものであらうと思う。禊ぎの習慣の  
 由来として、みぬまの出現を言う条くだりがあり、実際にも、みぬまが  
 はたらいたものと見られる。だが、その詞は、神賀詞とは別の物

で、あぢすき神と禊ぎとの関係を説く呪詞だったのである。その詞章が、断篇式に神賀詞にもはいつていつて、みぬまおよび関係深い白鳥の生き御調みつぎがわり込んできたものであるらしい。

水沼間・水沼・弥努波（または、婆）と三様に、出雲文献に出ているから、「水汲」と訂すただのは考えものである。後世の考えから直されねばならぬほど、風土記の「水沼」は、不思議な感じを持つているのだ。人間に似たもののように伝えられていたのだ。この風土記の上たてまつられた天平五年には、その信仰伝承が衰微していたのであろう。だから儀式の現状を説く古いにしえの口述が、あるいは禊ぎのための水たまりを聯想するまでになつていたのかも知れぬ。もちろんみぬまなる者の現れる事実などは、伝説化してしもうて

いたであろう。三津郷の名の由来でも、「三津」にみつまの「みつ」を含み、あるいは三沢（後藤さん説）にみぬ（沢をぬ・ぬま）と訓じたと見て）の義があつたものと見る方がよいかも知れない。でない、あぢすき神を学んでする国造の禊ぎに、みぬまの出現する本縁の説かれていないことになる。「つ」と「ぬ」との地名関係も「つ」から「さは」に変化するのよりは自然である。

#### 四 筑紫の水沼氏

筑後三瀨郡は、古い水沼氏の根拠地であつた。この名を称えた氏は、幾流もあつたようである。宗像三女神を祀つた家は、そ

の君姓の者と伝えているが、後々は混乱しているであろう。宗像神に事<sup>つか</sup>えるがゆえに、水沼氏を称したのもあるようである。この三女神は、分布の広い神であるが、性格の類似から異神の習合せられたのも多いのである。宇佐から宗像、それから三瀧というふうに、この神の信仰はひろがったと見るのが、今のところ、正しいであろう。だが、三瀧の地で始めて、この家名ができたと見ることはできない。

それよりも早く神の名のみぬま<sup>な</sup>があつたのである。宗像三女神が名高くなつたのは鐘が岬を中心にした航路（私は海の中道<sup>なかつち</sup>に對して、海北の道中が、これだと考えている）にいて、敬拝する者を護つたからのことと思う。水沼神主の信仰が似た形を持つた

がために、宗像神に習合しなかつたとは言えぬ。そういうことの考えられるほど、みぬま神は、古くから広く行きわたっていたのである。三瀧の地名は、みぬま・みむま（倭名鈔）・みつまなど、時代によつて、発音が變つてゐる。だが全体としては、古代の記録無力の時代には、もつと音位が自由に動いていたのである。

結論の導きになることを先に述べると、みぬま・みぬは・みつは・みつめ・みぬめ・みるめ・ひぬま・ひぬめなどと變化して、同じ内容が考えられていたようである。地名になつたのは、さらに略したみぬ・みつ・ひぬなどがあり、またつ・ぬを領格の助辞と見てのきり棄てたみま・みめ・ひめなどの郡郷の称号ができてゐる。

## 五 丹生と壬生部

数多かつた壬生部にうべの氏々・村々も、だんだん村の旧事を忘れて  
 行って、御封ミフという字音に結びついてしまつた。だが早くから、  
 職業は変化して、湯坐ユエ・湯母・乳母チオモ・飯嚼イヒガミのほかのものと考え  
 られていた。でも、乳部と宛てたのを見ても、乳母関係の名なる  
 ことは察しられる。また入部と書いてみみぶと訓よましているのを見  
 れば、丹生ニウ（にふ）の女神との交渉ウカガワが窺われる。あるいは「水に入  
 る」特殊シゴトの為事と、み・にニの音韻知識から、宛てたものともとれ  
 る。

後にも言うが、丹生神とみぬま神との類似は、著しいことなのである。それに大和宮廷の伝承では、丹生神を、後入のみぬま神と習合して、みつはのめとしたらしいのを見ると、ますます湯坐・湯母の水に關した為事を持ったことも考えられる。

事實、壬生と産湯との關係は、反正天皇と丹比<sup>タヂヒ</sup>壬生部との旧事によつてわかる。出産時の奉仕者の分業から出た名目は、おそらくにふ・みふの用語例を、分割したものであつたらう。万<sup>まん</sup>葉<sup>よう</sup>には、赭土<sup>ハニ</sup>すなわち、丹<sup>ニ</sup>をとる広場すなわち、原<sup>フ</sup>と解している歌もあるから、丹生の字面もそうした合理見から出ていると見られる。にふべからみふべ・みぶと音の転じたことも考えてよい。

産湯から育<sup>はぐく</sup>みのことに与<sup>あずか</sup>る壬生部は、貴種の子の出現の始めに

禊ぎの水を灌ぐそそぐ役を奉仕していたらしい。これが、御名代部の一  
 成因であつた。壬生部の中心が、氏の長おきの近親の女であつたこと  
 も確かである。こうして出現した貴種の若子わくごは、後にその女と婚  
 することになつたのが、古い形らしい。水辺または水神に關係あ  
 る家々の旧事に、玉依媛たまよりひめの名を伝えるのは、皆この類である。  
 祖オヤ（母）神に対して、乳母神オモカミをば（小母）と言つたところから、  
 母方の叔母すなわち、父から見た妻メの弟トという語ができた。これ  
 がまた、神を育む姥（をば・うば）神の信仰の元にもなる。  
 大嘗のなかとみのあまつかみのよごと中臣天神寿詞は、飲食の料としてばかり、天つ  
 水の由来を説いているが、日のみ子甦生そせいの呪詞の中に、産湯を灌  
 ぐ儀式を述べる段があつたのであろう。「夕日より朝日照るまで

天つ祝詞ノリトの太のりと詞ゴトをもて宣ノれ。かくのらば、……」——朝日の照るまで天つ祝詞の……と続くのでない。祝詞の発想の癖から言うと、ここで中止して、秘密の天つのりとに移るのである。この天つ祝詞にそうした産湯のことが含まれていたらしいことは、反正天皇の産湯の旧事に、丹比色鳴宿禰タヂヒシノメが天神寿詞を奏したと伝えている。貴種の出現は、出産も、登極とうきよくも一つであつた。産湯を語り、飲食を語る天神寿詞が、代々の壬生部の選民から、中臣神主の手に委ねられていつて、そうした部分が脱落していったものらしい。

けれども中臣が奏する寿詞にも、そうしたみふ類似の者の顕れたことは、天子の祓よおえなる節折りに、由来不明の中臣ナカトミメ女の奉仕

したことから察しられる。中臣天神寿詞と、天子祓えの聖水す  
 なわち産湯とが、古くはさらに緊密に繋つなががつていて、それに仕える  
 にふ神役をした巫女であつたと考えることは、見当違いではない  
 らしい。丹比タヂヒ氏の伝えや、それから出たらしい日本紀の反正天皇  
 御産の記事は、一つの有力な種子である。履中天皇紀は、ある旧  
 事を混同して書いているらしい。一ふたまた股たぶね船を池に浮べた話・宗像  
 三女神の示現などは、出雲風土記のあぢすきたかひこの神・垂仁  
 のほむちわけなどに通じている。だから、みつはわけ天皇にも、  
 生れて後の物語が、丹比壬生部に伝つていたことが推定できる。

## 六 比沼山がひぬま山であること

みぬま・みつはは一語であるが、みつはのめの、みつはも、一つものとしてよい。「罔象女」という支那風の字面は、この丹比神に一種の妖怪性を見ていたのである。またこの女性の神名は、男性の神名おかみに対照して用いられている。「おかみ」は「水」を司る蛇体だから、みつはのめは、女性の蛇または、水中のある動物と考えていたことは確からしい。大和を中心とした神の考え方からは、おかみ・みつはのめ皆山谷の精霊らしく見える。が、もつと広く海川について考えてよいはずである。

竜に対するおかみ、罔象に当るみつはのめの呪水の神と考えられた証拠は、神武紀に「水神を嚴イッ罔象女ミツハノメとなす」とあるので

わかる。だが大体に記・紀に見えるみつはのめは、禊ぎに關係なく、女神の尿または涙に成つたとしてゐる。逆に男神の排泄に化生したものとする説もあつたかも知れぬと思われのは、穢れから出ていることである。

阿波の国美馬郡の「美都波迺売神社」は、注意すべき神である。大和のみつはのめ称えをとつたのであろう。摂津の西境一帯の海岸は、数里にわたつて、みぬめの浦（または、みるめ）と称えられていた。ここには汶売神社があつて、みぬめは神の名であつた。前に述べた筑後の水沼君の祀つた宗像三女神は、天真名井のうけひに現れたのである。だから、禊ぎの神という方面もあつたと思う。が、おそらくは、みぬま・宗像は早く習合せられた別神であ

つたらしい。

丹後風土記逸文の「比沼山」のこと。ひちの郷に近いから、山の名も比治山ヒヂヤマと定められてしもうている。丹波の道主貴ムチが言うのに、ひぬま（氷沼）の……というふうの修飾を置くからと見ると、ひぬまの地名は、古くあつたのである。このひぬまも、みぬまの一統なのであつた。

第一章に言うたようなことが、この語についても、遠い後代まで行われたらしい。「烏羽玉うばたまのわが黒髪は白川の、みつはくむ汲むの方が「老いにけるかな」にしっくりせぬ。これはみつはの女神の蘇生の水に關聯した修辭が、平安に持ち越してわからなくなつたのを、習慣的に使うたまでだろうと説きたい。この歌などの

類型の古いものは、もつとみつはの水を汲む為事が、はつきり詠まれていたであろう。とにかく、老年変若を希<sup>ねが</sup>う歌には「みつは……」と言い、瑞齒に聯想し、水にかけて言う習慣もあつたことも考えねばならぬと思う。

丹比のみづはわけという名は、瑞齒の聯想を正面にしているが、初めは、みつは神の名をとつたことはすでに述べた。詞章の語句または、示現の象徴が、無限に譬喩化せられるのが、古代日本の論理であつた。みつはが同時に瑞齒の祝言にもなつたのである。だがこれは後についてきた意義である。本義はやはり、別に考えなくてはならぬ。

みぬま・みつは・みつま・みぬめ・みるめ・ひぬま。これだけ

の語に通ずるところは、水神に關した地名で、これに對して、にふ（丹生）と、むなかたの三女神が、あつたらしいことだ。

丹後の比沼山の真名井に現れた女神は、とよつかのめで、外宮げくうの神であつた。すなわちその水および酒の神としての場合の、神名である。この神初めひぬまのまなるの水に浴していた。阿波のみつはのめの社も、那賀郡なかのわなさおほその神社の存在を考えに入れてみると、ひぬま真名井式の物語があつたろう。出雲にもわなさおきななの社があり、あはきへ・わなさひなことないう神もあつた。阿波のわなさ・おほそとの關係が思われる。丹波の宇奈韋神ウナヱが、外宮の神であることを思えば、酒の水すなわち食料としての水の神は、処女の姿と考えられてもいたのだ。これがみつはの一面で

ある。

## 七 禊ぎを助ける神女

出雲の古文献に出たみぬまは早く忘れられた神名であつた。みつはは、まず水中から出て、用い試みた水を、あぢすきたかひこの命に浴あびせ申した。その縁で、国造神賀かむよごと奏上に上京の際、先例通りそのみつはが出て後、この水を用い始めるといふ習慣のあつたことを物語るのである。風土記のすでに非常に曖昧なところがあるのは、古詞をある点まで、直訳し、また異訳して、理会できぬところはその倂おもかげを出そうとしたからであらう。それが神賀詞と

なると、口拍子にのり過ぎて、一層わからなくなっているのである。おちこちの二か処の古川というのが、川岸というようになり、植物化して考えられていった。もつとも、神功紀のすら、植物と考えていたらしい書きぶりである。その詞章の表現は、やや宙ぶらりである。何としても「みつは……」は、序歌風に使われてい、みつはの神の若いと同様、若やかに生い出いずる神とでも説くべきであろう。

思うに、みつはの中にも、稚みつはと呼ばれるものが、禊ぎの際に現れて、その世話をする。この神の発生を説いて、禊ぎ人の穢れから化生したという古い説明が伝わらなくなったのかも知れぬ。とにかく、この女神が出て、禊ぎの場処を上・下の瀬と選び

迷うしぐさをした後、中つ瀬の適ヨロしい処に水浴をする。このふるまいを見習うて禊ぎの処を定めたらしい。これが久しく意義不明のまま繰返され、みぬまとしての女が出て、禊ぎの儀式の手引きをした。それがしだいに合理化して、水辺祓除のかいぞえに中臣女のような為事をするようになり、そのことに関した呪詞の文句がいよいよ無意義になり、他の知識や、行事・習慣から解釈して、発想法を拗ねじれさせてきた。そこに、だいたいはきまつて、一部分おぼろな気分表現が、出てきたのだろう。

オホユエ　大湯坐・若湯坐ワカユエの発生も知れる。みぬまに、候補者または「控え」の義のわかみぬまがあつたのであろう。大和宮廷の呪詞・物語には、みつはをただの雨雪の神として、おかみに対する女性の

精霊と見た傾きがあり、丹生女神とすら、いくぶん、別のものらしく考えた痕あとがあるのは、後入の習合だからであろう。

いざなぎの禊ぎに先だつて、よもつひら坂クに現れて「白もうす言こと」

あつた菊理媛ク（日本紀一書）は、みぬま類の神ではないか。物語

を書きつめ、あるいはもともと原話が、錯倒していたため、すぐ

後の憶アハギハラ原ミツの禊ぎくだりの条に出るのを、平坂ヨモツチモリの黄泉道守の白言と並

べたのかも知れぬ。その言うことをよろしとして散去したとある

のは、禊ぎを教えたものと見るべきであろう。くゝりは水クを潜マ

ことである。泳の字を宛てているところから見れば、神名の意義

も知れる。くゝり出た女神ゆえの名であろう。いざなぎの尊ミコばか

りの行動として伝えたため、この神は陰の者になったのであろう。

例の神功紀の文は、このくゝり媛からみつはへ続く禊ぎの叙事詩の断篇化した形である。住吉神の名は、底と中と表ウヘとに居て、神の身を新しく活いかした力の三つの分化である。「つゝ」という語は、蛇（＝雷）を意味する古語である。「を」は男性の義に考えられてきたようであるが、それに並べて考えられた汶売ミヌメ・宗像・水沼の神は実は神ではなかった。神に近い女、神として生きている神女なる巫女であったのである。海北道主ムチ貴は、宗像三女神の総称となっているが、同じ神と考えられてきた丹波の比沼神に仕える丹波道主貴は、東山陰地方最高の巫女なる神人の家のかばねであった。

## 八 とりあげの神女

国々の神部の乞食流離の生活が、神を諸方へ持ち搬んだ。これをてつとりばやく表したらしいのは、出雲のあはきへ・わなさひこなる社の名である。阿波から来経——移り来て住みつい——たことを言うのだから。前に述べかけた阿波のわなさおほそは、出雲に來経たわなさひこであり、丹波のわなさ翁・媪も、同様みぬまの信仰と、物語とを撒いて廻った神部の総名であつたに違いない。養い神を携えあるいたわなさの神部は、みぬま・わなさ関係の物語の語りでもあつた。わなさ物語の老夫婦の名の、わなさ翁・媪ときまるのは、もつともである。論理の単純を欲すれば、

比沼・奈具の神も、阿波から持ち越されたおほげつひめであり、  
 とよつかのめであり、外宮の神だとも言えよう。だが、わなさ神  
 部の本貫については、まだまだ問題がありそうである。

私は実のところ、比沼のうなる神は禊ぎのための神女であり、  
 その仕える神の姿をも、兼ね示すようになったものと信じている。  
 丹波道主貴の家から出る「八処女」<sup>ヲトメ</sup>の古い姿なのである。この神  
 女は、伊勢に召されるだけではなかった。宮廷へも、聖職奉仕に  
 上っている。この初めを説く物語が、さほひめ皇后の推奨による  
 ものとしていたのである。知られ過ぎた段だが、後々の便宜のた  
 めに、引いておく。

亦、天皇、其后へ、  
 命ミコトモタ 詔 しめして言はく、  
 「凡、およそ 子の名

は必かならず、母名づけぬ。此子の御名をば、何とか称へむ。「かれ、  
 答へ白もうさく、……。又詔ミコトモタ命しむるは、「いかにして、日ヒ  
 足タしまつらむ。」答へ白さく、「御母ミオモを取り、大湯坐ユエ・若湯ユ  
 坐エ定め（御母を取り……湯坐に定めてと訓む方が正しいであ  
 ろう。また、取御母を養護御母トリミオモのように訓んで、……に――  
 としての義——大湯坐……を定めてとも訓める）て、ひたし  
 奉らば宜ヨけむ。「かれ、其後の白しに随シタガヒモチ以て日足し奉る  
 なり。又、其后に問ひて曰はく、「汝所堅之美豆能小佩ナガカタメコシミツノヲヒモ（こ  
 おびか）は、誰かも解かむ。」答へ申さく、「且波比古多々  
 タニハノヒコタ、スミチノウシノミコむすめの女、名は兄比売えひめ・弟比売おと、此二フ  
 須美智能宇斯王タミチノウシノミコの女、名は兄比売・弟比売、此二  
 女王タミコぞ、浄オホミタカラき公オホミタカラ民（？）なる。かれ、使はさば宜よけむ。

……」

又、其後の白しもうのまゝに、みちのうしの王の女等、比婆須比ひばす売命、次に弟比売命（次に弟比売命……命……命とあるべきところだ）次に、歌凝比売命うたごり、次に円野比売命まとの、併せて四柱を喚メ上げサげキ。〔垂仁記〕

唯、妾死すとも、天皇の恩を忘れ敢へじ。願はくは、妾つの掌かされる后宮の事、宜しく好ヨキツマ仇マに授け給ふべし。丹波国に五婦人あり。志並トモに貞潔なり。是、丹波道主王の女なり。〔道主王は、稚日本根子大日々天皇の子（孫）彦坐王の子なり。一に云はく、彦湯産隅王の子なり。〕当まさに掖廷いに納いれて、后宮の数に盈アつべしと。天皇聽ゆるす。……丹波の五女を喚メして、掖

廷に納る。第一を日葉酢姫ヒハスと曰ひ、第二を淳葉田瓊入媛ヌハタヌイリと曰ひ、第三を真砥野媛マトヌと曰ひ、第四を※瓊アザミノイリ入媛と曰ひ、第五を竹野媛たかのと曰ふ。(垂仁紀)

この後が、古事記では、弟王二柱、日本紀では、竹野媛が、国に戻される道で、一人は恥じて峻ふかきふち淵ふかきふちに(紀では自墮輿とある)墮おち入つて死ぬ。それから、墮国オツと云うた地名を、今では弟国オトと云うとあるいはながひめ式の伝えになっている。

思うに、悪女の呪いのこの伝えにもあつたのが、落ちたものであろう。ほむちわけのみこのもの言わぬ因縁を説いたのが、古事記では、すでに、出雲大神の崇りと変っている。出雲と唾王子とを結びつけた理由は、ほかにある。紀の自墮輿而死の文面は「自

らオチイ墮り、コトアゲ興して死す」と見るべきで、興は興の誤りと見た方がよさそうだ。「おつ」・「おちいる」という語の一つの用語例に、水に落ちこんで溺れる義があつたのだらう。自殺の方法のうち、身投げの本縁を言う物語を含んだものである。水の中で死ぬることのはじめをひらいた丹波道主貴の神女は、水の女であつたからと考えたのである。

## 九 兄媛弟媛

やをとめを説かぬ記・紀にも、二人以上の多人数を承認している。神女の人数を、七ナ処女・八ヤ処女・九コ、イ、ノの処女などと勘定してい

る。これは、多数を凡そ示す数詞が変化していったためである。おおよ  
 それとともに実数の上に固定を来した場合もあつた。きた まず七処女  
 が古く、八処女がそれに替つて勢力を得た。これは、神あそびの  
 舞人の数が、支那式の「佾」イッを単位とする風に、もつとも叶うも  
 のと考えられだしたからだ。ただの神女群遊には、七処女を言い、  
 遊舞アソビには八処女を多く用いる。現に、八処女の出処でどころ比沼山にす  
 ら、真名井の水を浴びたのは、七処女としている。だから、七ナ—  
 —古くは八処女の八も——が、正確に七の数詞と定まるまでには、  
 不定多数を言い、次には、多数詞と序数詞との二用語例を生じ、  
 ついに、常の数詞と定まつた。この間に、伝承の上の矛盾ができ  
 たのである。

神女群の全体あるいは一部を意味するものとして、七処女の語が用いられ、四人でも五人でも、言うことができたのだ。その論法から、八処女も古くは、実数は自由であつた。その神女群のうち、もつとも高位にいる一人がえ（兄）で、その余はひつくるめておと（弟）と言つた。古事記はすでに「弟」の時代用語例に囚とらわれて、矛盾を重ねている。兄に対して大オホあるごとく、弟に対して稚ワカを用いて、次位の高級神女を示す風から見れば、弟にも多数と次位の一人とを使いわけたのだ。すなわち神女の、とりわけ神に近づく者を二人と定め、その中で副位のおとと言うようになったのである。

こうした神女が、一群として宮廷に入ったのが、丹波道主貴の

家の女であつた。この七処女は、何のために召されたか。言うまでもなくみづのをひもを解き奉るためである。だが、紐と言へば、すぐ聯想せられるのは、性的生活である。先達諸家の解説にも、この先入が主となつて、古代生活の大切な一面を見落されてしまつた。事は、一続きの事実であつた。「ひも」の神秘をとり扱つた神女は、条件的に「神の嫁」の資格を持たねばならなかつたのである。みづのをひもを解くことがただちに、紐主そなわにまかれることではない。一番親しく、神の身に近づく聖職そなわに備るのは、最高の神女である。しかも尊体の深い秘密に触れる役目である。みづのをひもを解き、また結ぶ神事があつたのである。

七処女の真名井の天女・八処女の系統の アツマアソビ 東遊ヒギヤ 天人も、飛

行の力は、天の羽衣に繫かかつていた。だが私は、神女の身に、羽衣を被るとするのは、伝承の推移だと思う。神女の手で、天の羽衣を着せ、脱がせられる神があつた。その神の威力を蒙つて、神女自身も神と見なされる。そうして神・神女を同格に観じて、神をやや忘れるようになる。そうなると、神女の、神に奉仕した為事も、神女自身の行為になる。天の羽衣のごときは、神の身についたものである。神自身と見なし奉つた宮廷の主の、常も用いられるはずの湯具を、古例のつとに則る大嘗祭の時に限つて、天の羽衣と申し上げる。後世は「衣」という名かかわに拘つて、上体をもおほ掩うものとなつたらしいが、古くはもつと小さきものではなかつたか。ともかく禊ぎぎ・湯ゆあ沐みの時、湯や水の中で解きさける物忌みの布と

思われる。誰一人解き方知らぬ神秘の結び方で、その布を結び固め、神となる御躬の靈結びを奉仕する巫女があつた。この聖職、漸く本義を忘れられて、大嘗の時のほかは、低い女官の平凡な務めになつていった。「御湯殿の上の日記」は、その書き続がれた年代の長さだけでも、為事の大事であつたことがわかる。元は、御湯殿における神事を日録したものらしい。宮廷の主上の日常御起居において、もつとも神聖な時間は、湯を奉る際である。この時の神ながらの言行は記し留めねばならない。こうしてはじまつた日記が、せいぎゆう聖躬の健康などに関しても書くようになり、はては雑事までも留めるに到つたものらしい。由緒知らぬが棄てられぬ行事として長い時代を経たのである。御湯殿の神秘は、古い昔

に過ぎ去った。髪やかづらを重く見る時代が来て、御櫛笥殿みくしげどのの方に移り、そこに奉仕する貴女の待遇が重くなつていった。

一〇 ぶぢはらを名とする聖職

この沐浴の聖職あずかに与るのは、平安前には「中臣女」の為事となつた期間があつたらしい。宮廷に占め得た藤原氏の権勢も、その氏女なる藤原女の天の羽衣に触れる機会が多くなつたからである。わが岡のオカミに言ひて降らせたる、雪のくだけし、そこに散りけむ（万葉卷二）

天武の夫人、藤原大刀自オホトジは、飛鳥の岡の上の大原に居て、天皇

に酬むくいている。この歌のごときは「降らまくは後ノチ」とのからかいに對する答えと軽く見られている。が、藤原氏の女の、水の神に縁のあったことを見せているのである。「雨雪のことは、こちらが専門なのです」こういった水の神女としての誇りが、おもしろく昔の人には感じられたのであろう。藤井が原を改めて藤原としたのも、井の水を中心としたからである。中臣女や、その保護者の、水に對する呪力から、飛鳥の岡の上の藤原とのりなおして、一つに奇瑞を示したからであろうと考える。中臣寿詞を見ても、水・湯に絡んだ聖職の正流のような形を見せている。中臣女の役が、他氏の女よりも、恩寵を得る機会を多からしめた。光明皇后に、薬湯施行に絡んで、廢疾人として現れた仏身を洗うた説話の

伝っているのも、中臣女としての宮廷神女から、宮廷の伝承を排して、后位に備るにさえ到った史実の背景を物語るのである。藤原の地名も、家名も、水を扱う土地・家筋としての称えである。そとおり衣通媛の藤原郎女いらつめであり、禊ぎに關聯した海岸に居おり、物忌みの海藻の歌物語を持ち、また因縁もなさそうな和歌浦の女神となつた理由も、やや明るくなる。

私は古代皇妃の出自が水界に在つて、水神の女であることならばに、その聖職が、天子即位甦そせい生を意味する禊ぎの奉仕にあつたことを中心として、この長論を完了しようとしているのである。学校の私の講義のそれに触れた部分から、おし拈げた案が、向山武男君によつて提出せられた。それによると、衣通媛の兄媛なる

允いんぎよう 恭きょうの妃の、水盤の冷さを堪たえて、夫王うごかを動して天位に即つか  
 しめたという伝えも、水の女としての意義を示しているとするの  
 だ。名案であると思う。穢れも、荒行に似た苦しい禊ぎを経れば、  
 除き去ることができ、また天の羽衣を奉仕する水の女の、水に潜カッ  
 いて、冷さに堪えたことを印象しているのである。水盤をかかえ  
 たというのは、齋ユカハミツ河水の中に、神なる人とともに、水の中に居  
 て久しきにも堪えたことをいうのらしい。やはりこの皇后の妹で、  
 衣通媛のこころらしい 田井タキ中比売ナカヒメの名代ナシロを河部と言うたことなど  
 もおほくどのみこの家に出た水の女の兄媛・弟媛だったことを示  
 すのだ。

だが、衣通媛の名代は、紀には藤原部としている。藤原の名が、

水神に縁深い地名であり、家の名・団体の名にもなつて、かならずしも飛鳥の岡の地に限らなかつたことを見せる。ふぢはふちと一つで「淵」<sup>フチ</sup>と固定して残つた古語である。かむはたとべの親は、山背大国不遲（記には、大国之淵）であつた。水神を意味するのが古い用語例ではないか。ふかぶちのみづやればなの神・しこぶちなどから貴<sup>ムチ</sup>・尊<sup>ムチ</sup>なども、水神に絡んだ名前らしく思われる。神聖な泉があれば、そこには、ふちのいる淵があるものと見て、川谷に縁のない場処なら、ふちはらと言うたのであろう。

みづのをひものみづは瑞<sup>ミツ</sup>と考えられそうである。だが、それよりもまだ原義がある。このみづは「水」という語の語原を示している。聖水に限つた名から、日常の飲料をすら「みづ」と言うよ

うになつた。聖水を言う以前は、禊ぎの料として、遠い浄土から、時を限つてより来る水を言うたらしい。満潮に言うみつも、その動詞化したものであろう。だから、常世波トコヨナミとして岸により、川を溯り、山野の井泉の底にも通じて春の初めの若水となるものである。みつくしは、このみづをあげたものの顔から姿に言う語で、勇ましく、猛々しく、若々しく、生き生きしているなどと分化する。初春の若水ならぬ常の日の水をも、祝福して言うたところから拈がったものであろう。満潮時をば、人の生れる時と考えるのも、常世から魂のより来ると考えたためであるらしい。みつぬかしは（三角柏・御綱柏）や、みづきと通称せられるいろいろの木も、禊ぎに用いた植物で、海のあなたから流れよつて、根を

おろしたと信じられていたものらしい。

みつはまた地名にもなった。そうした常世波のみち来る海浜として、禊ぎの行われたところである。御津とするのは後の理会で「つ」そのものからして「み」を敬語と逆推してとり放したのであった。常世波を広く考えて、遠くよりより来る船の、その波に送られて来着く場処としてのみつを考え、さらに「つ」とも言うようになつたのである。だから、国造の禊ぎする出雲の「三津」、やそしま八十島ゴケイ祓えや御禊の行われた難波なにわの「御津」などがあるのだ。津ツと言うに適した地形であつても、かならずしもどこもかしこも、津とは称えないわけなのである。後にはみつの第一音ばかりで、水を表して熟語を作るようになった。

## 一 一の 天の羽衣

みづのをひもは、禊ぎの聖水の中の行事を記念している語である。瑞<sup>ミツ</sup>という称え言ではなかった。このひもは「あわ緒」など言うに近い結び方をしたものではないか。

天の羽衣や、みづのをひもは、湯・河に入るためにつけ易<sup>か</sup>えるものではなかった。湯水の中でも、纏<sup>まと</sup>うたままはいる風が固定して、湯に入る時につけ易えることになった。近代民間の湯具も、これである。そこに水の女が現れて、おのれのみ知る結び目と<sup>き</sup>ほぐして、長い物忌みから解放するのである。すなわちこれと

同時に神としての自在な資格を得ることになる。後には、健康のための呪術となった。が、もつとも古くは、神の資格を得るための禁欲生活の間に、外からも侵されぬよう、自らも犯さぬために生命の元と考えた部分を結んでおいたのである。この物忌みの後、水に入り、<sup>ヲチ</sup>変若返つて、神となりきるのである。だから、天の羽衣は、<sup>カムナガラ</sup>神其物の生活の間には、不要なので、これをとり<sup>かく</sup>匿されて地上の人となったというのは、物忌み衣の後の考え方から見たのである。さて神としての生活に入ると、常人以上に欲望を満たした。みづのをひもを解いた女は、神秘に触れたのだから、神の嫁となる。おそらく湯棚・湯桁は、この神事のために、設けはじめたのだろう。

御湯殿を中心とした説明も、もはやせざるしく感じだされた。もつと古い水辺の禊ぎを言わねばならなくなった。湯と言え、温湯を思うようになったのは、「出イづるゆ」からである。神聖なことを示す温い常世の水の、しかも不慮の湧出を讃えて、ゆかハはと言イい、いづるゆと言ウうた。「いづ」の古義は、思いがけない現出を言うようである。おなじヲチミツ変若水信仰は、沖縄諸島にも伝承せられていルる。源河節ヂンガハリカアの「源河走河ウシユや。水か、湯か、潮か。源河みウスヂやらびの御甦ウスヂ生ヂどころ」などは、時を定めて来る常世浪とこよなみに浴する村の巫女ミヤラビの生活を伝えたのだ。

常世から来るみづは、常の水より温いと信じられていたのであるが、ゆユとなるトとさらに温度を考カえるようになった。ゆユはもと、

齋ユである。しかしこのままでは、語をなすに到らぬ。齋用水ユカハあるいはゆかははみづづの形がだんだん縮ちぢまつて、ゆゆ一音で、齋用水を表すことができるようになった。だから、ゆゆは最初、禊ぎぎの地域を示した。齋戒沐浴をゆゆかかははああみみ（紀には、沐浴を訓よむ）と言うこともある。だんだんゆかかははを家の中に作つて、ゆかかははああみみを行うようになつた。「いづるゆかかはは」がいでゆゆであるから推せば、ゆかかははも早くぬぬる水みづになつていたであろう。ゆかかははが家の中の物として、似あわしくなく感じられだしてくると、ゆかかははを意味するゆかかががししだだいにぬぬる水みづの名となつてゆくのは、自然である。

ゆかはの前の姿は、多くは海浜または海に通じる川の淵などにあった。村が山野に深く入ってからは、大河の枝川や、池・湖の入り込んだところなどを択んだようである。そこにゆかはだな

(湯河板拳)を作つて、神の嫁となる処女を、村の神女(そこに生れた者は、成女せいじょ戒かいを受けた後は、皆この資格を得た)の中から選り出された兄エラトメ処女が、このたな作りの建て物に住んで、神のおとずれを待っている。これが物見やぐら造りのをささずきずき(また、ささじきじき)、懸崖カケ造りなのをたなたなと言うたらしい。こうした処女にえの生活は、後世には伝説化して、水神の生け贄にえといった型に入る。来るべき神のために機はたを構えて、布を織つていた。神御服カムミンはすな

わち、神の身とも考えられていたからだ。この悠遠な古代の印象が、今に残った。崖の下の海の深淵や、大河・谿谷の澱よどみのあたり、また多くは滝壺の辺などに、箴おさの音が聞える。水の底に機を織っている女がいる。若い女とも言うし、処によつては婆さんだとも言う。何しろ、村から隔離せられて、年久しくいて、姥となつてもうたのもあり、若いあわれな姿を、村人の目に印したままゆか**はだ**なに送られて行つたりしたのだから、年ばいはいろいろに考えられてきたのである。村人の近よらぬおそろ畏しい処だから、遠くから機の音を聞いてばかりいたものであろう。おぼろげな記憶ばかり残つて、事實は夢のように消えた後では、深淵の中の機織る女になつてしまふ。

たなばた  
七夕の乞巧きこうでん奠は漢土の伝承をまる写しにしたように思っている人が多い。ところが存外、今なお古代の姿で残っている地方が多い。

たなばたつめとは、たな（湯河板挙）の機中にある女ということである。銀河の織女星は、さながら、たなばたつめである。年に稀におとなう者を待つ点もそっくりである。こうした暗合は、深く藤原・奈良時代の漢文学かぶれのした詩人、それから出た歌人を喜ばしたに違いない。彼らは、自分の現実生活をすら、唐代以前の小説の型に入れて表して、得意になっていたくらいだから、文学的には早く支那化せられてしまうた。それから見ると、陰陽道の方式などは、徹底せぬものであった。だから、どこの七夕祭

りを見ても、固有の姿が指摘せられる。

でも、たなばたが天の川に居るもの、星合ひの夜オキマツに奠マツるものと信じるようになったのには、都合のよい事情があつた。驚くばかり多い万葉の七夕歌を見ても、天上のことを述べながら、地上の風物からうける感じのままを出しているものが多い。これは、想像力が乏しかったから、とばかりは言えないのである。古代日本人の信仰生活には、時間空間を超越する原理が備つていた。呪詞の、太初ハジメに還す威力の信念である。このことは藤原の条にも触れておいた。天香具山あめのかぐやまは、すくなくとも、地上に二か所は考えられていた。比沼の真名井は、天上のものと同視したらしく、天狭アメサ田ダ・長田は、地上にも移されていた。大和の高市は天の高市、近

江の野洲川は天の安河と関係あるに違いない。天の二上は、地上に到る処に、二上山を分布（これは逆に天に上したものと見てもよい）した。こうした因明以前の感情の論理は、後世までも時代・地理錯誤の痕を残した。

湯河板拳の精霊の人格化らしい人名に、天湯河板拳があつて、鶺鴒を逐いながら、御禊ぎの水門を多く発見したと言っている。地上の齋河を神聖視して、天上の所在と考えることもできたからである。こうした習慣から、神聖観を表すために「天」を冠らせるようにもなった。

地上の齋河ユカハに、天上の幻を浮べることができるといふから、天漢に当る天の安河・天の河も、地上のものと混同して、さしつかえは感じなかつたのである。たなばたつめは、天上の聖職を奉仕するものとも考えられた。「あめなるや、弟おとたなばたの……」と言うようになったわけである。天の柵機津女たなばたつめを考えることができれば、それにあたかも当る織女星に習合もせられ、また錯誤からくる調和もできやすい。

おと・たなばたを言うからは、水の神女に二人以上を進めたこともあるのだ。天上の忌服殿イムハタドノに奉仕するわかひるめに対するおほひるめわかひるめのあつたことは、最高の巫女でも、手ずから神の御服を

織つたことを示すのだ。

古代には、機に関した讚え名らしい貴女の名が多かつた。二三をとり出すと、おしほみゝの尊の後は、たくはた・ちはた媛（また、たくはた・ちゝ媛）と申した。前にも述べた大国不遅フヂの女垂仁天皇に召された水の女らしい貴女も、かりはたとべ（いま一人かむはたとべをあげたのは錯誤だ）、おと・かりはたとべと言う。くさか・はたひ媛は、雄略天皇の皇后として現れた方である。

神功皇后のみ名おきなが・たらし媛の「たらし」も、記に、帯の字を宛てているのが、当っているのかも知れぬ。

ひさかたの天アメかな機。「女鳥メトリのわがおほきみの織オリす機。誰タが

料タネろかも。」

記・紀の伝えを併せ書くと、こういう形になる。皇女・女王は古くは、皆神女の聖職を持つておられた。この仁徳の御製と伝える歌なども、神女として手ずから機織る殿に、おとずれるまればとの姿が伝えられている。機を神殿の物として、天を言うのである。言いかえれば、処女の機屋に居てはたらくのは、夫なるまればとを待つていることを、示すことにもなつていたのであろう。

天孫又問ひて曰はく、「其秀起たる浪の穂の上に、八尋殿起て、手玉もゆらに織ハタオヲトメこれたる少女は、是誰が子女ぞ。」答へて曰はく、「大山祇神の女等、大は磐長姫と号り、少は、木華開耶姫と号る。」……（日本紀一書）

これは、海岸の齋用水ユカハに棚かけわたして、神服織る兄エたなば

たつめ・弟<sup>オト</sup>たなばたつめの生活を、ややこまやかに物語っている。丹波道主貴の八咫女のことを述べたところで、いはなが媛の呪咀は「水の女」としての職能を、見せていることを言うておいた。このはなさくや媛も、古事記すさのをのよつぎを見ると、それを証明するものがある。すさのをの命の子やしまじぬみの神、大山祇神の女「名は、木花<sup>コノハナチル</sup>知流比売」に婚<sup>ア</sup>うたとある。この系統は皆水に関係ある神ばかりである。だから、このはなちるひめも、さくやひめとほとんどおなじ性格の神女で、禊ぎに深い因縁のあることを示しているのだと思う。

一四 たなという語

漢風習合以前のたなばたつめの輪廓は、これでほぼ書けたと思う。だが、七月七日という日どりは、星祭りの支配を受けているのである。実は「夏と秋とゆきあひの早稲のほの／＼と」と言うている、季節の交叉点に行うたゆきあひ祭りおこのであつたらしい。

初春の祭りに、ただ一度おとずれたぎりの遠つ神が、しばしば来臨するようになった。これは、先住漢民族の茫漠たる道教風の伝承が、相混じていたためもある。ゆきあひ祭りを重く見るのも、それである。春と夏とのゆきあひに行うた鎮花祭と同じ意義のもので、奈良朝よりも古くから、邪気送りの神事が現れたことは考えられる。鎮花祭については、別に言うおりもあろう。ただ、木

の花の散ることの遅速によって、稲の花および稔りの前兆と考え、できるだけ躊躇ヤスラわせようとしたのが、意義を変じて、田には稲虫のつかぬようにとするものと考えられた。それと同時に、農作は、村人の健康・幸福と一つ方向に進むものと考えた。だから、田の稲虫とともに村人に来る疫病は、逐おわるべきものとなった。春祭りの「春田打ち」の繰り返しのような行事が、だんだん疫神送りのような形になった。

## 一五 夏の祭り

七夕祭りの内容を小別こわけしてみると、鎮花祭の後すぐに続くう卯

月八日づきの花祭り、五月に入つての端午せつくの節供や田植えから、御ごりよ霊う・祇園うの両祭会・夏神楽までも籠めて、最後に大祓うらえ・盂蘭うら盆ぼんまでに跨ぼんつてゐる。夏の行事の総勘定うらのような祭りである。

柳田先生の言われたように、卯月八日前後の花祭りは、実は村の女の山入り日であつた。おそらくは古代は、山ごもりして、聖なる資格を得るための成女戒をうけたらしい日である。田の作物を中心とする時代になつて、村の神女の一番大切な職分は、五月の田植えにあるとするに到つた。それで、田植えのための山入りのような形をとつた。これで今年さおとめの早さ処女とめとなる神女が定まる。男もおおかた同じころから物忌み生活に入る。成年戒を今年授かろうとする者どもはもとより、受戒者もおなじく禁欲生活を長く

経なければならぬ。霖ながあめ雨の候の謹身ツミであるから「ながめ忌み」とも「雨アマづゝみ」とも言うた。後には、いつでもふり続く雨天の籠居を言うようになった。

このながめいみようになったが、これは田植えのはじまるまでのことで、いよいよ早苗をとり出すようになる、この物忌みのひもは解き去られて、完全に、神としてのふるまいが許される。

それまでの長雨ナガメイ忌みの間を「馬にこそ、ふもだしカかくれ」と歌われた繫カイ・絆ホダシ（すべて、ふもだし）の役目をするのが、ひもであった。こういう若い神たちには、中心となる神があった。これら眷属を引き連れて来て、田植えのすむまで居て、さなぶりウを饗ウけて還る。この群行の神は皆簔を着て、笠に顔を隠していた。いわば

昔考えたおにの姿なのである。



# 青空文庫情報

底本：「古代研究※」[#ローマ数字]「1-13-21」―祭りの発生」  
中央公論新社

2002（平成14）年8月10日発行

初出：「民族 第二卷第六号」

1927（昭和2年）年9月

「民族 第三卷第二号」

1928（昭和3年）年1月

※訓点送り仮名は、底本では、本文中に小書き右寄せになっています。

※底本の題名の下に書かれている「昭和二年九月、三年一月「民族」第二巻第六号、第三巻第二号」はファイル末の「初出」欄に移しました。

入力：高柳典子

校正：多羅尾伴内

2003年12月27日作成

2013年1月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 水の女

折口信夫

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>